

<オリエンテーション>

A. テーマ:「旧約聖書と哲学的問い」

B. 目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教講義A・B」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

C. 到達目標

- ・キリスト教をテーマとした研究(卒論・修論)を行うために必要な方法や知識を身につけることができる。
- ・キリスト教研究に関する広い知見をもとに、自主的な研究に取り組む能力を養う。
- ・キリスト教をテーマとした研究を発表するための訓練を受けることができる。

D. 確認事項

- ・受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加(参考文献による復習を含め)を期待したい。質問は、オフィスアワー(火3・水5)を利用するか、メール(Sadamichi.Ashina@gmail.com)で行うこと。
- ・成績はレポートによる。

E. 授業スケジュール

初回のオリエンテーションに続いて、次のような項目について、講義が進められる。一回の講義で一つの項目が取り上げられる。

0. オリエンテーション	10/3
1. 創造論とギリシャ哲学	10/10
2. 契約思想の射程	10/17
3. 罪と悪	10/24
4. 王国とは?	10/31
5. 歴史と終末	11/7
6. 預言者とグローバル化	11/14
7. 知恵文学の意義	11/21
8. ヨブ記を読む	12/5
9. 黙示文学と社会批判	12/12
10. 旧約聖書と平和の問題	12/19
11. ジェンダーから見た旧約聖書	12/26
12. 拝一神教とその純化	1/9
(13. 旧約聖書において死とは何か))
14. メシア思想	1/16

15. フィードバック

<導入>アブラハムと哲学

1. 関根清三「近代日本の哲学と聖書解釈—和辻哲郎と西田幾多郎の場合—」(『理想』2018 N.701、理想社、4-16頁)。

「アブラハムが神に愛児イサクを献げようとする、謂わゆるアケーダーのテキスト(「創世記」二二章一一九節)、「哲学者は、これを合理的に読み解くことに腐心してきた。」

「このような理不尽な神は本物かどうか分からないから従わないとアブラハムは応えるべきだったと、テキストそのものを改変しようとしたカント」

「逆に倫理的なものの目的論的停止をした信仰の騎士アブラハムを讃えて、その非倫理性を等閑に付してしまったキルケゴール」

「あるいはアブラハムは例外者だが、普通の我々に神はこのような非倫理的な要求をしないと常識的な線で休心しようとしたブーバー」

「この神は人一般を指し、唯一絶対の一人の人が他の人との関係を断つことを要求するのが対人倫理の本質だと神人関係を人間関係へとずらして換骨奪胎したデリダ」

「その読解はどれも十分な説得力を持つようには見えない。」

「それに比べ、西田の方向の解釈は解釈史上唯一、このアケーダーの真髓を剔抉し、正面から謎を解くものではあるまいか」、「この神は自己否定の神であり、己の善性を否定し子殺し教唆という極悪にまで下り、そのことによって、そもイサクを彼に与えた贈与者である神を忘却しイサクを私物化していたアブラハムの罪を超克するように誘ったのだ、と解するのである。」(7頁)

2. 関根清三『旧約聖書と哲学——現代の問いのなかの一神教』岩波書店、2008年。

第一章 イサク献供物語の哲学的解釈——創世記二二章の謎を解く

- 1 キルケゴールの解釈とその評価
- 2 カント、ブーバー、レヴィナス、デリダ、宮本の解釈とその批判
- 3 ヨセフと西田幾多郎の解釈
- 4 結論

おわりに

「歴史学的な説明が、テキストの第一義的な衝迫力に富むメッセージを、正面から受け止めないで、単なる客観的な解説に墮することを恐れるのである。論者が敢えて哲学的主体的な考察を試みた、主たる動機はここにある。」

「哲学的解釈」「歴史学的解釈」

「両者の相補性の必要を確認しつつ、しかしここでは特に、従来旧約学が無視ないし忌避しがちだった、哲学的な解釈の重要性を強調したことをお断りしておきたい。」(42)

3. 創世記22章1節～(新共同訳)

◆アブラハム、イサクをささげる

22:1 これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼び

かけ、彼が、「はい」と答えると、2 神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」3 次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った。4 三日目になって、アブラハムが目を凝らすと、遠くにその場所が見えたので、5 アブラハムは若者に言った。「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていなさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」6 アブラハムは、焼き尽くす献げ物に用いる薪を取って、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。二人は一緒に歩いて行った。7 イサクは父アブラハムに、「わたしのお父さん」と呼びかけた。彼が、「ここにいる。わたしの子よ」と答えると、イサクは言った。「火と薪はここにあります。焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」8 アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。9 神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。10 そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。11 そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、12 御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげること惜しまなかった。」13 アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。14 アブラハムはその場所をヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。15 主の御使いは、再び天からアブラハムに呼びかけた。16 御使いは言った。「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので、17 あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。18 地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」19 アブラハムは若者のいるところへ戻り、共にベエル・シェバへ向かった。アブラハムはベエル・シェバに住んだ。」

4. 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」（1946年）（全集十一巻、『自覚について他四篇 西田幾多郎哲学論集Ⅲ』岩波文庫）

「エホバはアブラハムに、その一人子イサクの犠牲を求めた神である。・・・人格そのものの否定を求めた神である。単に悪に対しこれと戦う神は、たとい、それが何処までも悪を克服するといっても、相対的な神である。単に超越的に最高善的な神は、抽象的な神たるに過ぎない。絶対の神は自己自身の中に否定を含む神でなければならない、極悪にまで下り得る神でなければならない。悪逆無道を救う神にして、真に絶対の神であるのである。最高の形相は、最低の質料を形相化するものでなければならない。絶対のアガペは、絶対の悪人にまで及ばなければならない。神は逆対応的に極悪の人の心にも潜むのである。・・・」（334-335）

「道徳は一般的であり、宗教は個人的である。キェルケゴールにいうが如く、道徳的騎士と信仰の騎士とは、此の如き意味において相反する立場に立つのである。・・・神はアブラハムよと呼び、見よ我此にありと答えた彼であった。しかも彼は人類の代表者として立ったのである。・・・宗教において、自己が自己を脱して神に帰するということは、個人的安心のためにとということではない。人間が人間を脱することである。それは神の創造の事実来接することであるのである。そこに神が自己自身を示現するとともに、我々が啓示に接するのである。故に信仰に入るとは、人間が人間の決断を以て神の決断に聴従するというのである。」(363)

「万有神教的ではなくして、むしろ万有在神論的 **Pamemmtheismus** とみうべきであろう。」
(329)